

捻くれ楽くん

かのけーき

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

もし、楽くんに友達ができずに捻くれてしまつたらというストーリー。原作楽くんの
影も形もないでのご注意を。最早オリ主です。

目 次

プロローグ

一条楽は協力する。

一条楽は一つの可能性を考える。

29

14 1

プロローグ

友達。

俺は生涯を通して、この紙のごとく薄っぺらく、そしてそこが見通せる程浅はかな川の
ような言葉に何度裏切られたか計り知れない。

いや、より正確に言うならば”偽物の友達”に裏切られたというべきなのかも知れな
い。

ともかく、俺は友達という存在をわざわざ苦労してまで作る価値はないと思つてい
る。

勘違いして欲しくないのは、俺が友達を作ることに対する否定的だと思われてしま
うことだ。

俺は欺瞞や虚飾、そして嘘で塗り固められたコミュニティを形成し、そのコミュニ
ティ間で一喜一憂し合うぐらいなら友達を作る意味はないと思つてているのだ。

偽物の関係で喜び合うことに何の意味があるのだろうか。

偽物の関係で互いを励まし合うのには何の意味があるのだろうか。

声高々に宣言しよう。意味など決してない。

偽物の喜び合いは嫉妬の集合体となり、偽物の励まし合いは互いを蔑みあうものしかならない。

偽物から生じるものは負の感情のみなのだ。

そして、レプリカの商品が本物の商品に劣るように偽物の関係は本物の関係より非常に脆弱。

そのような脆弱なものを必死に維持するために、自分に負荷をかけるぐらいならそれは愚者がする選択だと言えるに違いない。

故に偽物が蔓延するこの世界で、数少ない本物を諦めるという選択をできたものは絶対的な強者^{ぼつち}であるのだ。

にもかかわらず、強者は周りの凡人どもから蔑まれ、息苦しさを感じさせる生活を強いられるのが世の常だ。

何故なら愚者達は、このような強者たちを負の個性があるものとして決めつけてしまうからである。

有名な詩人、金子みすゞは『みんなちがつてみんないい』という言葉を残したが、現代においてこの言葉は通用しないと思われる。

何故ならば、現代社会は個性あるものは周縁として扱われ、遅かれ早かれつまはじきにされてしまうからだ。

故に異物である強者がマジヨリティたる凡人どもから排他されるのも無理はないのかもしない。

では、社会に有益である個性を持つものはどうなるのか？

これも凡人どもの妬み嫉みの対象とされ、異物扱いされることとなるであろう。結局のところ、この世はプラスであろうがマイナスであろうが、待ち受ける運命はバツドエンドしかありえないのだ。

だから、個性ある異物はこの世では生きづらい。

全く、ハードモードがあるのはゲームだけでいいってのに。

だが、俺はそのハードモードを受け入れることにした。そう、諦めることによつて。諦めることで人生は多少なりとも楽になる。

余計な期待や希望的観測を抱くことはなくなり、気分が沈むこともなくなる。

そして、諦めることでそれを口実に自分を慰めることもできる。

諦めてしまつたのだから、何事にも”以上”を求めるのは間違いだと。自分には以下もしくは未満がお似合いだと。

結論を言おう。諦めた強者に素晴らしい祝福があらんことを。そして、リア充はガソ

（ぱつち）

リンスタンドにでも突っ込んで大爆発しろ。

のどかな小鳥のさえずりが聞こえてくる。

寝起き特有の重い瞼を開けると、容赦ない日差しが俺の眼球を襲つた。ファツキンモーニン。

さて、どうやら今日も今日とて全国の学生さん、社畜さんを憂鬱にさせる朝がやつてきたようだ。

ラジオ体操の歌の歌詞の一節には朝をプラスな物として捉えているが、俺にとつての朝は嫌悪すべきものでしかない。

朝は毎日同じものとしか感じられないし、希望という要素は片鱗も感じられない絶望の朝であるし、喜びに胸を開けるのではなく、あまりの悲しみに心を塞いでしまうし、青空仰ぐどころか常に下を俯き、外界との接触を常時シャットダウンしながら歩くことが俺にとつての朝である。

そんな朝を迎えてどうして気分よくいられるのであろうか、いやいられない。

それに加えて、今日の寝覚めは普段と比べて数割増しで最悪である。
何故なら、

「はあ……。またあの夢か……。」

俺は、よく稀にとある夢を見る。それは幼い頃にした約束を再現した夢だ。

『ザクシャ イン ラブ』

『あなたは「鍵」を』

『私は「鍵」を』

『肌身離さず、ずっと大切に持つていよう』

『……いつか私達が大きくなつて再会したら』

『この「鍵」でその中のものを取り出すから』

『そしたら——』

『……結婚しよう！』

小さい頃にした約束。

物心がついて幼い男女同士がある一時の感情のみで交わした特別の意味も価値も持たない約束、と随分前に割り切った筈なのだが、時折こうして夢に出てきては俺の気分をすこぶる悪くさせる。

俺がこの夢を見た時に気分が悪くなる理由の一端としては、自分で自分が嫌になるからだ。言い換えると自己嫌悪に陥るのだ。

期待や希望を抱くことをやめた身としては、これは由々しき事態なのである。

過去に踏ん切りをつけたと自分では認識していても、いまだに夢に出てくるということは、まだそのことに関する心残りがあるということ。

それすなわち、僅かながらでも「もしかしたら！」なんて期待をしているということだ。

表面上では割り切つたつもりでいても、心の奥底では切り離すことができない。

もしもの話なんて所詮ただの虚構に過ぎず、そして贋作でしかないのにも関わらずだ。

そんな贋作である期待や希望により縋つっている自分という存在が心の奥底にいると考えると反吐ができる。

さて、朝っぱらから気分が最悪な状態になつているわけだけれども、俺は今すぐにでも朝の日課をこなさなければならない状況下にある。

布団の中で『あと5分♪』なんてテンプレ的なことを言いながら引きこもつていたいが、時間は無情であり非情、そんなことは言つてられない。

「ザ・ワールド！」

当然ながら時は止まらない。

俺の渾身の雄叫びに反応し止まつたものといえば、庭に侵入してきた柄の悪そうな4本足のお友達、野良の三毛猫だ。

言うまでもないが、2本足のお友達は俺には一人もいない。

だが、俺にとつての唯一のお友達である三毛猫はまるで汚物を見るかのような目つきでこちらを睨みつけ、威嚇を始めた。

それはまるで、お前みたいなインキヤぼっちと友達になつた覚えはないニヤ！と言つているようにも思える。

そうだよなあ、朝のお散歩中にしけたツラしたインキヤぼっちにキュートな見た目をした自分が友達扱いされたら気分が悪くなるよなあ。

いや、マジで調子乗つてすんませんした。

これからはこれまで以上に身の程をわきまえて生きていくんで許してください。

と、心の中で三毛猫に謝罪しつつ布団を畳もうとすると、どこからかともなく視線を感じた。

視線の感じた方向に顔を向けると、そこにいたのは親の顔より見たと言つても過言ではないヤクザ達がいた。それも、少しだけ開いた襖から顔を覗かせ、目をキラキラと輝かせながら。

怖い怖い、笑顔が怖い。元の顔が強面だから余計に怖い。というか、そういう可愛いらしい仕草はヤクザがやるべきではないと思います。

ギヤップ萌えを狙つてるはずがない。ギヤップ萌えなのかもしれない？ギヤップ萌

えなのだろうか？ギヤップ萌えを狙つてゐるに違ひない。

おい、納得しちやつたよ。納得したくないことだつたのになあ。

まあギヤップ萌え云々はさておき、今までの経験上、こういつた時のヤクザ共は大抵ろくなことを考えていない。

例を挙げるとキリがないが、とりあえず俺の胃がキリキリ痛むような面倒なことをしでかす。そういうた點を踏まえて俺はワザとヤクザ共から視線を逸らし、何事もなく布団をたたみ始めた。

だが、そんな俺の心中を察せないKYな一人のヤクザが口を開いた。

「坊ちゃん！ またあのときみたいに一緒に遊びます？ ほら、坊ちゃんが漆黒の黒龍ダークネスブラツド？ みたいなやつで、ワシらが政府直属暗殺部隊、闇の執行者役をやるやつ！ ところで、ザ・ワールドつて新技つすか？」

俺は畳みかけていた布団を光の速さで再び身にかぶつた。

ヤクザの悪意なき一言が俺のガラスのハートを貫いたその後、自身を必死に励ますことで何とか立ち直ることができた。

たが、立ち直つたといつても心に深い傷を負つたことは確かなことである。

実際、登校中の今でも脳内で『雨にも負けず、風にも負けず、ヤクザにも黒歴史にも負けぬ丈夫な心を持ち』なんてことを唱えるレベルに俺の心は傷ついている。

……なあ、誰かオススメのカウンセラーを教えてくれ。

宮沢賢治の作品をパロつて自分を励まし始める人間つて絶対に正気の沙汰じやないからさ。

いや、まず第一に俺に何かを教えてくれるようなやつはいねえなあ。

もう、楽つてばうつかり屋さんなんだからあ、デヘツ！

……全米が泣き始める様子が目に浮かぶぜ。

カンヌ国際映画祭の男優賞も夢じやないな！

はあ……。

誰に披露するでもない渾身の自虐ネタに一人で悲しみにくれていると、ガヤガヤと話しが聞こえ始めてきた。

声の主達は当然ながら、俺が通つている凡矢理高校の生徒である。

生徒達は皆ギリギリ遅刻しないような時間帯を狙つて登校しようという考え方であるのか、この時間帯はやけに人が多い。

「おつーす！ 楽う！ 相変わらず目が腐つてんなあ」

学校の校門近くから開口一番に礼儀の“れ”的字も知らなそうな発言をぶちかましきたのは腐れ縁のメガネこと、舞子集。

とにかくウザいキャラを気取っているが、その洞察力は侮れず、腹の底では何を考えているのかわからない。要するに腹黒メガネ。

よつて、無視するのが吉。それとウザいし。ここポイントな。

「て、おい！ 無視するなんて酷いなあ。俺は万年ばつちの楽に氣を使って毎日校門で待つてるつていうのにさー」

ヘラヘラと笑いながら俺の肩に突っかかる舞子。

このように、このメガネは人の神経を逆なでする天才である。俺にとつては相変わらずのウザさであり、最早反応する気すら起きないが。

「もー、楽は捻デレだなー。無視決め込んでるけど、実は心の中で嬉しすぎて舞い上がつてんだろう？ 俺にはわかるぜ！」

謎のグツジヨブとドヤ顔いただきました。

愛嬌欠点、ウザさ満点、殺意満点。

それと、舞い上がっているのはお前の頭の方だ。

まず、捻デレってなんだよ。

マジ卽！みたいな知能指数が欠けてそうな造語を作るんじやない。

そして、俺の無反応をどういう風に捉えたらそこまで脳内お花畠な解釈ができるのか
甚だ疑問だ。

「あ、そういうや楽。今日転入生が俺らのクラスに来るらしいぜ。それもとびつきりの美人！ いやー樂しみだな！」

「ふーん、そうか」

毛ほども興味ない。そいつが美人であろうがなかろうが、俺と関わり合いを持つ可能性はゼロに等しい。むしろマイナスにいくまである。

「……なあ楽」

ジト目でこちらを見てくる舞子。

その様子は反応が薄かつた俺に一言二言、物申したげである。

「なんだ」

「お前つてさ、もしかして感情がないのか？ 普通の男子高校生は美人の転入生がくるって聞いたら心躍るだろ」

「安心しろ、感情ならしつかりある。毎日ウエイウエイ騒いでるクラスの連中を煩わしく思つてるし、常に懷疑心を抱きながら生きてるからな」

他にも妬み、嫉み、僻み、恨み、辛み、憎しみ、嫉妬は俺の得意分野だ。

「……お前らしいな！」

少しばかり変な間があつたが、納得してくれたようで何より。と、話がひと段落したその時であつた。

雲ひとつない快晴の日であるのにも関わらず、突然日差しを遮る影が割り込んできたのは。

「ん？」

顔を上げると目の前に広がっていたのは水玉のパノラマ。そうJKの生パンツである。

どうしてパンツが見えたのかというと、JKが空をかけていたからである。
うん、冷静に脳内で現場検証してみても意味がわからん。

ついに俺の思考能力は正常に働かなくてなつてしまつたか。でも現実だしなあ。
時をかけるJKならまだ理解できる範疇だつたんですけど。ほら、少女がJKに変わ
るぐらいの違いしかないしさ。

非常にたわいもないことを考えながらを二度とお目にかかることがないかも知れな
い水玉パンツを目に焼き付けていたその時、鈍痛が俺の体を襲つた。

「……いってえ」

膝蹴りである。JKが俺の顔面に膝蹴りをかましたのである。
当然ながら俺は地面とキスをするかたちでぶつ倒れた。

「いつたあ……あ、ごめん！ 急いでるから！ ホントごめんねえええ!!」

あつさりすぎるほどの謝罪。最早あつさりすぎて謝罪とは呼べないレベル。

あのJK、毎日ゆずぽん風呂にでも浸かってるのか？ そうでもしないと性格にまであのあつさり加減は現れないぞ。ゆずぽんだけに。

「おい、楽。お前……」

舞子の不安げな声が耳に入つてくる。

「お前……パンツ見えただろ？ 僕も見たかつたなあー！ JKの生パンツ！」

今ここで、俺＜ JKのパンツという不等号式が証明された。

つまり、JKのパンツを被つた俺＞ JKのパンツという不等号式も成り立つ。よし、これからはJKのパンツを被つて生きていこう。

一条楽は協力する。

膝蹴りをかまされた箇所が痛む中、教室の扉を開く。

「舞子おはよう！」

「おう、佐藤おはよう！」

舞子が知りもしないクラスメイトと挨拶を済まして、俺は忍びの^ごとく気配を消し、自然とその場からフェードアウトすると自分の座席へと座り、寝たふりをする。

これがいつもの日常。

ボツチである俺に話しかけてくる変人も、クラスの連中との付き合いは欠かせないと
いうことだ。

「そういうや舞子。今日転校生がくるって知ってるか？ それもめっちゃ美人の！ す
げえ楽しみだなあ……て、なんだよそのニマニマ顔は？ 俺なんかおかしなこと言つた
か」

「いや、これが男子高校生の普通の反応だよなーって思つただけだよ」

そういうと、舞子はこちらに視線を向けてくる。普通じゃなくてすいませんね、なに
ぶん他人より数倍思考が捻くれてるボツチなもので。

だけれど、そんなボツチであることを俺自身はとても気に入っているし、現状に対する不満なんでものもほとんどない。

”ほとんど”というと少しはあるということにつながることは安易にわかるだろう。例えば、社会に対する不満はありありだ。俺がこうなつてしまつたのは、主に社会全体の偏見が原因であるし、学生時代をいくら頑張つても最終的に待ち受けてるのは社畜生活という社会構造にもため息しか出ない。

ああ、社畜になりたくねえー。

どうやつても社畜になつてしまふ運命を嘆いてると、ふと誰かに見られているような感覚に陥る。

俺が席に着き寝たふりをし始めると、ほぼ毎日のように視線を感じるのだ。
視線の主は決まつて毎回同じである。

俺は氣怠げさを前面に出しつつ、視線を感じた方向へと目を向ける。

「……！」

俺が目を合わせると即行で視線を逸らしたのはクラスいや学年のマドンナと言つても差し支えのない存在の小野寺小咲。容姿端麗、品行方正、そして聖母の如き優しさ併せ持つという男の理想を一つにぎゅつと詰め込んだ女子生徒ある。

そんな女神が毎日視線を向けてくれるとなつたら、並みの男子ならば無様な勘違いをし、コロつと落ちる。

だが、俺は違う。

あの視線には好意なんてものは一欠片もない。あれは過去のいざこざからくる視線だと俺は断言する。

もしくは同情の視線である。憐憫の視線である。孤高を極めたる俺からしてみれば必要のないものだ。

「おーい、席につけお前らー。S H R始めるぞー」

教師の声が教室内に響くと、雑談をしていたクラスの連中は慌ただしく席に着き始める。

「よし、まずは転校生を紹介するぞー。それじゃ入ってきて桐崎さん」「はい！」

明朗快活な返事と共に扉をガラリと開く音が聞こえてくる。

机に伏している形で寝たふりをしているので、転校生の姿はよくわからんが、とても好印象を与える感じの返事であつたことは確かだ。

「初めまして！ アメリカから転校して來た桐崎千棘です！ 母が日本人で父がアメリカ人のハーフですが、日本語はこの通りバツチリなのでみなさん気さくに接して下さい

ね！」

「うおー！　スンゲエ！美人だ！」

「スタイル抜群すぎだろ！　本当に高校生か!?」

「尊い……！」

おい、オタクが混じつてんぞ。確実に転校生を見て言つたセリフじやないだろ。スマホの写真フォルダにある金髪エルフ娘を見て言つたセリフだろ。

いや、それは俺のことだつたわ。

「うーんと、それじやあそこで寝てるあいつの隣で大丈夫？」

「わかりました」

おーい、今寝てる冴えないやつ良かつたな。

これから胸キュン王道ラブコメ展開が始まるぞー。

……つて俺以外に寝てるやつおるんか？

それよか、『大丈夫？』つて何？　インキヤぼつちの隣の座席を拒絶された時の予防線

？

そんなことを考えながら寝たふりを続行していると足音が段々と近づいてくるのが

わかつた。

すると突然、足音が俺の机の前で止まつた。

どうして席に座らないんだ？

「これからよろしくね！」

残念ながらよろしくしない。俺はお前みたいな陽キヤと関わり合いを持つ気はない。何故なら人間強度が著しく低下するからな。

とは口に出しては言わないが、心の中ではそう思つている。

それにもしても、わざわざ挨拶するとは律儀なやつだ。

まあ、相手が挨拶をしてきたのだから挨拶を返すのは道理であろう。

そう思い寝たふりをやめ、顔を上げると、そこにいたのは少しばかり面識のある金髪JKだった。

「みずたま……」

おい、俺は何を言つてるんだ。決して取り返しのつかないことを言つてしまつたぞ。が、俺の意に反して金髪JKは不思議そうな顔を浮かべ、また周囲の生徒達も疑問符を浮かべている。

金髪JKの鈍感さに救われたと言うべきか……。

と、胸を撫で下ろしたその時。金髪JKはハツと何かに気づいたかのように顔を真っ赤にしながらスカートを抑え、そして、

「こ、この変態野郎があーー！」

目にも留まらぬ速さで俺の顔面に神の左並みのパンチをかましたのである。

俺は意識がノックアウトするのと同時に悟った。

これからはインキヤばつちではなく、変態クソ野郎として学校生活を送ることを。

つまり、底辺のスクールカーストから最底辺のスクールカーストに転落したということがだ。

さよなら、訪れもしなかつた俺の青春。こんにちは、暗黒面。

ダースベ○ダーも夢じやないぜ。



時は変わつて昼休み。

そう学生にとつては憩いの時間である。

そのことは俺にとつても例外ではなく、軽くスキップしてしまうほどだ。

それに今日は色々とあつたせいで、昼休みが待ち遠しくて仕方なかつた。

こんな時こそ、屋上で風にあたりながら昼飯を食うという有意義な時間の使い方が俺の心を癒してくれるはずだ。

待つてろ俺のオアシス！ もうすぐ着くからな！

軽やかな足取りでオアシスへと向かう間、普段は煩わしく思える喧騒も特になんとも

思うことはなかつた。

そして、オアシスの扉の前に辿り着くと、俺はその扉を躊躇することなく開けた。

だが、俺の視界に広がつたのはオアシスではなく、ジヤングルであつた。
どうしてジヤングルなのかつて？

そりやあ、ゴリラが飯食つてたらその場所はジヤングルに決まつてんだろうが。

「おい、お前は俺から居場所を奪うためにこの学校に来たのか？ 対ばつち戦闘用兵器
なのか？」

「うつさい、話しかけんな変態。それとキモいこと言うのやめてくんない。キモいから」
転校生は不機嫌さを隠しもせず、侮蔑の3Kを二度繰り返すという強調表現で相手の
精神を確実に削り取る高等テクニックをかましてきた。

侮蔑の3K、つまりキモい、クサイ、汚い、だ。侮蔑の3Kを言われた相手はもれな
く精神的に死ぬ。

だが、その程度の罵詈雑言では俺のメンタルは崩れない。百戦錬磨のぼつちにその程
度の安い言葉は通じはしないぞ。

特にキモいに対しての耐性はバツチリだ。

今まで世知辛い世の中を渡り歩いてきた俺は、体の芯まで凍るようなマジのキモいを
幾度となく言われてきたからな！

最早キモさに關しては誰にも劣らない自身まである。

何故か目が潤つてきたが気にするようなことではないだろう。花粉症が辛い時期だしな！

とりあえず、俺がすべき最優先事項は我がベストプレイスからあの転校生を移動させることだ。

その為には、まず転校生もといゴリラに自然とこの場から離れてもらうような流れを作ることが必要がある。

頭ごなしに『この場からどけ！』と言ったところで効果が薄いのは分かりきっている。何かしらの理由があるからこそ、転校生はこの場にいるのだ。

とりあえず、俺は転校生がどうしてこの場にやつってきたのかを聞いてみることにした。

まあ、大方の予想はついてはいるのだが。

「なあ、どうして屋上で一人寂しく飯食つてんだよ」

「…………」

M U ☆ S H I ☆

そして、なまら美人である為、その姿が様になつてゐるのが余計に腹立たしい。それにしても、無理矢理にでも口を開かせなければどうにもならなさそうだ。

なるべく穩便にことを済ませてしまひたかつたのだが仕方ないか。

「もしかして、一緒に飯を食うことを避けられた、とか？」

「……！」

反応あり、ビンゴのようだ。

「まあ、無理もないよなあ。転校初日から暴力沙汰を起こしたもんなんあ」

「……あんた、何が言いたいの？」

ゴリラのこわい顔！

楽の防御力が、がくっと下がつた！

楽の取り繕う！ ステータスが元に戻つた！

「いや、特に何も」

「ねえ、そうやつて意味ありげな態度取られると物凄くイラつくんだけど」

「そう言われてもこれは一つの手段だからなあ」

「なんの手段よ」

「何つて、お前と会話をするための手段だけど」

「ふーん、あんたつて相当のおバカさんみたいね。会話したかつたから普通に話しかけ

「じゃあ、俺が普通に話しかけたらお前は反応するのか？ しないよな？」

実際、俺がお

前に話しかけた時シカト決め込んだじやねえか』

「そ、それは……」

歪めようのない事実を突きつけられ閉口する転校生。

とりあえず第一関門である”会話をする”ということには成功した。

やり方に関しては最悪なわけだが。

もしこの場にいるのが超絶イケメンリア充だつたならば、より良い方法で事態を解決出来たのであろう。が、生憎と俺にはそのような顔面とコミュニケーション力は備わっていない。

「まあ、一人で飯食つてる理由は詳しく聞かねえよ。事情は察してるし。それと悪かつたな、嵌めたりして」

「別に謝らなくてもいい。無視した私も悪かつたし」

「ほーん」

「な、なによ、その意外そうな顔は」

「素直に謝罪ができる人間なんだと思つてな」

「……もう一回ぶん殴られたい?」

「……普通に褒めただけなんですけど。それともう一つ言いたいことがある。ストップ暴力犯罪。ワレもう痛いの嫌だ」

「はあ、わかつたわよ……」

俺の切なる望みが届いたのか転校生はため息をつきながら拳を引き、再び口を開く。
「どうか、さつきので褒めたつもりつて……。コミュニケーション能力足りてないんじゃない？」

「コミュ力は必要最低限あればいいんだよ。他人と話す機会なんてほほないしな」
ボツチあるあるを語ると、転校生はまるで悲しいものを見るかのような目つきで俺を見てきた。

「おい、何だその哀れみの目は」

「あんた友達いないでしょ？」

「愚問だな。いるわけがない」

またもや、先程と同じ目つき。

「だから、何だその哀れみに満ちた目は。もしかして、ボツチ可哀想〜〜とか思つてるんじゃないあるまいな？」

「その通りだけど」

「ほん、馬鹿にするのは構わないが、お前も今はその”ボツチ”なんだぞ。俺を哀れんでいる余裕があるということは、さぞかし友達作りが得意なんでしょうね？　なあ、ミスボツチ？」

「あ、当たり前じゃない！　　私にかかれば友達の一人や二人あつという間に作れるに決まつてるわ！　それと、ミスボツチじやなくて桐崎千棘　！　名前ぐらい覚えておきなさいよね、この変態ボツチ！」

「ボツチは否定しないが、変態呼ばわりはやめろ。そもそもあれは事故であつて、俺は何も悪くない。悪いのは堀を飛び越えてきたお前だ。つまり、俺は被害者でお前は加害者。キヤンユーアンダースタンド？」

「その舐め腐つた発音クソ腹立つわね……。というか、私が加害者つてどういうことよ！パンツを見たのはあんたでしょ！」

「お前な、男子高校生をなんだと思ってるの？　そこにパンツがあれば嫌でも見てしまうし、巨乳で美人なお姉さんがその場にいたら自然と視線がその魅惑的な球体に吸い寄せられるような生物なんだよ？　だから、パンツを見せるような派手な動きをしたお前が悪い」

「キモツ……」

おつと、これはゴミを見るような目ですね。

それと、そういうチクチク言葉は口には出さずに心の中で呟くものだぞ。
これ、楽との約束な。約束破つたら針千本飲ますからな。

得体の知れない誰かさんと約束を交わしていると、ふと腹の虫が鳴つた。

そうだ、俺はここに飯を食いにきたんだった。ゴリラをいかにジャングルから退かすかで頭がいっぱいになつていて、本来の目的を忘れていては本末転倒である。

そう思い、俺は桐崎が座つているベンチの隣のベンチへと腰を下ろし食事を始めた。今日の昼食は今朝に色々とあり弁当を作る時間がなくなつたので、コンビニで買ったおにぎりと濃いお茶である。

一匹のお邪魔虫がいるので完璧な憩いな時間とはいかないが、そこは我慢だ。と、おにぎりを食し始めて数分後、桐崎が何やら俺をじーっと見つめて動かなくなつた。

「なんだ」

「あんたつてどうして一人でいるの?」

藪からステイツクに失礼なことを聞いてくるなあ。人のデリケートな部分を詮索しちゃいけないつてマツマとパツパに教わらなかつたの?

「ボツチいじりか? なら質問には答えんぞ」

「違う。純粹に疑問に思つたの」

桐崎の凛とした表情はふざけ半分で聞いているようには見えない。

適当にあしらうつもりだつたが、どうやらそうは問屋が卸さないらしい。

「そうだなあ、一人でいたいからつてのが理由としては大きいかな。まあ、他にも色々と

理由はあるが

「そうなんだ。でも、私には理解できないわ。一人でいたいって思えるなんて。絶対に友達と一緒にいた方が楽しいのに」

「理解なんてできるわけないだろうが。人はそれぞれ異なる価値観を持つてるからな。俺からしてみれば、友達と一緒にいることが楽しいという感情に結びつく道理がわからぬい」

「そうね。あんたからしてみれば友達は必要ないのかもしれない。でも、私は憧れを捨てきれない」

桐崎の物言いは含みがあり、悲壮感で溢れていた。そして、その姿はかつての俺自身を彷彿させるような姿にも思えた。

根拠は全くないが。

とりあえず、今までの会話を振り返ると、俺が解消すべき問題は見つかった。
あとはそれを解決するのみ。

「よし、お前の友達作りに協力してやろう

「は？」

俺の唐突な発言に口をポカンと開ける桐崎。

まあ、急に言われたらそんな声も出るわな。

「だから、言葉通りの意味だ」

「……どういう風の吹き回し？」

「まあ、俺には俺の成すべきことがあつてだな、それを達成するためにはお前に友達を作つてもらわないと困るんだよ。これは善意なんてものじやない。ただのエゴだ。だから、貸し借りとかは気にする必要もない」

「でも、あんたみたいなボツチに友達作りに協力するつて言われてもね……」

「案ずるな。人を見る目に関しては人一倍長けてる自信があるからな。どいつと仲良くなつた方がいいかぐらいのアドバイスはできる。まあ、アドバイスをするだけであつて、最終的にはお前が友達になりたい人と友達になればいい。そうだな、俺はいわば情報屋みたいな立場だと思つて貰えればいい」

「そう、なら悪くないかも……」

こうして、俺と桐崎の一時的な友達作り戦線が締結された。

一条楽は一つの可能性を考える。

桐崎の友達作りに協力すると宣言してから一日後の放課後。俺は早速、桐崎を屋上に呼び出し、話し合いすることにした。

屋上の放課後というと何だかロマンティックな響きに聞こえ、これから王道的なラブコメが始まると思われるのだろうが、悲しきかな、これから始まるのはボツチとボツチによる友達作り大作戦である。最早ラブコメの片鱗すら感じないし、ボツチとボツチによる友達作りとか虚しさしか感じられない。

もういつそのこと、隣人部作っちゃう？　俺もハーレム形成しちゃうか？　いや、まず前提としてヒロインがゴリラしかいない時点で詰みだなあ。ああ、俺の周りに美少女ヒロイン達がいればなあ。

「ねえ、あんた凄いニヤニヤしてるけどやめた方がいいわよ。それ、人前でやつたら警察に通報されると思うから」

出来もしないハーレムに夢を馳せていると、こちらをリアルの世界に連れ戻す辛酸な言葉が俺の心と鼓膜を貫いてきた。表情に出すだけなら自己完結で済む紳士の行いなので通報される筋合いはない。通報するなら手を出すやつにしてくれ。

「第一回、友達100人できるかな？ 大作戦の会議はーじまるよー」

俺のタイトルコールに対し返ってきたものは、桐崎の凍てつく視線ただそれだけである。ドM歓喜！ まるで、南極にいるかのような感覚をご堪能あれ！ こんな感じのキヤツチコピーだつたら売れるかもな。

「へい、ミスボッチ。その絶対零度を具現化したような態度はなんなんだ？」
「ネーミングセンスがないのと、単純に気持ち悪いなあつて思つて。それと、ミスボッチ言うな」

「はあ、そんなんだから友達ができねえんだよお前……」

「なつ！ 私の態度と友達ができないことは全く関係ないと思うんだけど！」

俺の呆れたような反応に、桐崎は心外だと言わんばかりに憤慨し始める。

「いや、大アリだな。いいか、友達同士つてのは場の空気だけを大事にするしようもないものだ。だから、先程のような謎なノリにも合わせなければならぬ時もある。もし、ノリに合わせなければどうなると思う？」
「ど、どうなるのよ？」

「空氣読めない奴というレッテルを貼られ、ハブにされる。そうなりたくはないだろ？」
「う、うん……」

桐崎はさつきの様子とは打って変わり、すっかり気を沈めてしまった。

お灸を据えすぎてしまつたか。桐崎が周りに対して自然に振る舞えなくなつたりでもしたら少しばかり申し訳ないし、一応フオローはしておくか。

「まあ、そんな低脳なことをする奴と引き合わせないつてのも俺の仕事の一環だからな。今の話は心に留めておくぐらいでいいだろ」

「……わかつた」

「で、話は戻るが、クラスの連中を観察するといつても闇雲に観察してたんじやあキリがない。そんで、ある程度の目星はつけときたい。とりあえず、桐崎の趣味と特技を教えてくれ」

すると桐崎は首を傾げて疑問符を浮かべる。その姿はまるで、俺の言つている言葉の意味が理解できないと言つた感じだ。嫌な予感が頭によぎるのは、きっと気のせいではないだろう。

「ん？ 私の趣味と特技なんかで目星がつけられるの？」

「ねえ、なんで俺の方が友達作りに関して詳しいの？ 自分で言うのもなんだが、俺万年ボツチの可哀想な人間なんですけど？」

「しょ、しようがないじやない！ 私は家庭の事情で普通に友達が作ることができなかつたのよ！」

「へいへい、友達作りに普通な作り方と特殊な作り方があるのか知らんが、お前が友達作

りを苦手としているのはわかつたよ」

「わかればいいのよ……。で、なんで私の趣味と特技を聞く必要があるの？」

ああ、説明するのがかつたるい。そもそも俺が今から説明しようとしているのは友達作りの基礎中の基礎であつて、ネットでグーグル先生が簡単に教えてくれるものだ。だから、俺がわざわざ説明するまでもないのだ。

だが、その旨を俺がこいつに伝えたら別の意味で面倒になりそうだなあ。

「いいか、人ってのは共通の趣味さえあれば、話が盛り上がりがつて案外簡単に仲良くなれるもんだ。だから、桐崎の趣味がわかれれば目星は簡単につけられる。それと特技に関しては自分のアピールポイントとも言えるものだ。つまり相手の印象づけに非常に役に立つ。よく知りもしないやつから話しかけられても不気味がられるだけだが、ある程度の印象さえあればそうなることもない」

「へえー勉強になるわ。変態ボツチの割に友達作りに詳しいのね」

「変態ボツチはやめて？ せめてボツチだけにして？」

「ボツチだけだと私とあんたが同類みたいでなんか嫌」

「あー、わかるわかる同族嫌悪ってやつだなそれ。て、そんな理由で変態呼びが許されるわけねえだろが。顔面にパイでもぶち当てるやろうか？」

「私に喧嘩で勝つつもり？ ふーん、上等よ。いつでもかかつてきなさいよ。返り討ち

にしてあげるわ」

そういうと桐崎は拳を構え、臨戦態勢に突入した。桐崎拳法その一、ゴリラの構え。その構えは曰く、まるでゴリラのような腕力から放たれる重い一撃から命名されたものだと言っている。つまり、俺はパイをぶち投げるのではなく、体をぶち抜かれる可能性があるので。やだー、降参するしかないじやないですかー。

「くそー、こんなにもか弱い男子高校生を武力で弾圧するなんて。お前は独裁者に向いてるよ」

争いを生む前に身を引く俺、マジ平和の象徴。流石今まで争いをしなかつたことだけある。いや、争い合う相手がいなかつたんだわ。より正確に言うならば、自分を平和の象徴と思い込んでいたただのボツチの方が正しいな。知りたくなかつた衝撃の事実がここに明かされました。

「はあ、話を戻すか。まず、お前の趣味はなんだ?」

「うーん、クラシックを聴くのは割と好きね」

音楽の感性は性格と真逆なんだな。見てくれは美人だし、こいつの猛々しい一面を知らない奴にとっては違和感はないか。逆に言うと、俺からしてみれば違和感ありありなワケであって、笑いの感情が込み上げてくるのだが。まあ口に出すと、圧倒的戦力差によりフルボツコの刑に処されるので、黙つておくのが吉であろう。

「了解した。で、特技は？」

「そうね、メイクに裁縫、運動も大体できるし、学校の成績も大抵はA判定だつたわ」「……ただの完璧超人じやねえかよ。おまけに帰国子女の金髪美人つて……。お前は

ギヤルゲーの世界から飛び出してきたヒロインなの？ 属性多すぎでしょ」

「ぎや、ギヤルゲー？ ぞ、属性？ あんた一体何言つてんの」

「ああ、気にするな。お前には一生かかっても理解できない単語だろうからな」

「そう。でも、なんとなくあんたが身の毛がよだつようなことを言つてるのはわかつた
わ」

え、何でそんなことわかつたわけ？ エスパー？ エスパー桐崎なの？ テニスラ
ケットをくぐつたりしちやうの？ もしかして高能力者？

まあ、桐崎が高能力者かどうかはさて置き、こいつに友達ができるない事情というのが
とても気になる。容姿端麗、頭脳明晰、身体能力抜群。非の打ち所がないのにも関わら
ず友達ができない。先程、家庭の事情故に友達ができるないと言つていたことから、醜い
嫉妬にまみれた女子どもからイジメられていたという線も薄い。

「そういえば、お前が友達ができなかつたのは家庭の事情が原因つて言つてたよな。な
んかあんのか？」

「そ、その話は今関係あるの？」

桐崎は気まずそうに視線をこちらから逸らし、明らかに動搖している。

「いや、ねえけどさ。単に疑問に思つてな。完璧超人の桐崎に友達ができる理由つてのが。自分なりに色々と原因を考えてみたが、どれも可能性としては低い。あ、もしかして親が転勤族なのか？ それならこの変な時期に転校してきたのも納得がいく」

「……家の事情についてはあまり話したくない」

人には他人に打ち明けたくない秘密というものが一つや二つは必ずある。桐崎にとつて、それは家庭事情ということなのだろう。だつたら、俺がそのことを知ろうと踏み込んでいい理由はない。

秘密とは自分の内に本当に秘めておきたいものなのだ。それを知ることができるのは、秘密を抱えるものが真心を許し、共有していくといふと思えた相手のみだろう。だから、俺が桐崎の秘密を知ることは一生ないに違いない。

「どうか。なら別に話さなくてもいいわ」

「うん、助かる」

その後俺は桐崎に対して友達作りに関する様々な提案をした。例えば、自分の得意とするものを授業でうまく利用して周りにアピールするだとか、似たような趣味を持つている奴がいたら積極的に話してみる、とかだ。

そんな話をしていたら時間はあつという間に過ぎ去り時刻は18時を回っていた。

「よし、今日の作戦会議はこれで終了だ。次は明日の放課後にこの場所で」

「わかつたわ」

桐崎の了承を得たので、バツグを手に持ち、一刻も早く帰つてソシヤゲの周回をやろうと足を動かしたところ、かぼそい声が俺を呼び止めた。

「……ね、ねえ」

「あん？」

後ろに振り返つて見てみると、そこには何だかモジモジしている可愛らしい生物がそこにいた。ちなみに、ゴリラの赤ちゃんではない。

「そ、その……。あ、ありがと。あんたのおかげ友達作り上手く行く気がしてきた」

感謝の言葉。俺の主観でしかないが、おそらく心からの感謝。錆び付いた心と見るもの全てが空っぽに見えてしまう灰色の視界に色が満ち溢れ、僅かながらに暖かみを感じられるのは果たして気のせいだろうか。

ああ、きっと気のせいだろう。いや、気のせいでなければおかしい。そうでなければ過去の俺を否定してしまうことになる。

「そりやどーも。でも、俺は感謝されるようなことは何もしていない」

「……え？ それってどういう意味？」

「昨日言ったろ。お前の手助けをしている理由はただのエゴだ。つまり、俺が利を得る

ための行いだ。だから、桐崎が感謝する必要はない」

もう一度言う。俺の行いはただのエゴだ。利己だ。自己中だ。他人からしてみれば醜い行いにしか見えない。当たり前だ。彼女に協力という体で手を差し伸べたのは唯一の自分の居場所を取り戻すという傲慢な考え方からの行いだからだ。

だから、俺は決して感謝されるべきではないのだ。

空を見上げると、色艶やかなはずの夕日が俺にはひどく色褪せて見えていた。

○ ○ ○

初の友達作り会議からすでに一週間がたつた。桐崎の友達作りの結果を言うと、大成功に終わつたと言えるだろう。

ボツチに悩んでいた昔の桐崎とは違つて、今ではリア充の仲間入りを果たし毎日幸せそうな日々を送つてているように見える。

それに対して俺は、あいも変わらずボツチ生活をエンジョイ中。

現在は体育の授業を校庭の隅つこのベンチで絶賛見学中である。見学理由は体調不良である。言わざもがな、体育の授業を見学するための嘘である。

一般人からしてみれば体育は楽しいものだと思うのだろうが、俺は違う。例えば、バスケのシュート練習時にリア充が盛り上がっているところに順番的にやむなく俺が

シユートを撃とうとする。この結末は安易に予想できるだろう。そう、今まで盛り上がっていたムードが微妙なものへと変貌する。

リア充つてのは場を盛り上げることが一番の得意分野だと思つていたが、どうやら俺の認識は全くの見当違いだつたらしい。

え？ 得意だけど時と場合による？ なるほど、確かにリア充はボツチを相手に盛り上がる時はこちらを陰で蔑む時ぐらいだな。

目に見えない一酸化炭素、目の見えないところで陰口を叩くリア充。

つまり、リア充は有害物質と大差ないな。よつて、リア充を市中引き回しの上、打ち首獄門に処す。

閑話休題、俺が無慈悲の判決を下していると周囲がざわついているのが耳に入つてき

た。

生徒の注目を集めていたのは、やはり桐崎であつた。

彼女は現在進行形で高鉄棒で連続宙返りをしている。モンキーですかあなた。

「ほえー、すげえな桐崎さん」

感嘆の声を漏らしているのは舞子集。今は休憩時間であるためなのかは知らんが、何故かしつと俺の隣にいる。

「やっぱり桐崎さんは美人だな。それに、勉学と運動も万能ときた。そりやあ男子から

人気出るのもおかしくないわ」

「ああ、そうだな」

「で、俺は楽に聞きたいことがあるんだけどよー」

「なんだよ」

「お前、桐崎さんといつから仲良くなつたのよ?」

何を言いだすんだこの腹黒メガネは。

「そう思った理由は?」

「お、否定しないんだな。珍しい」

「いいから答えろ」

「まあまあ怒るなつて。そうだな、人づてに腐つたしたいと桐崎さんが放課後の屋上で
楽しそうに話してゐつて聞いたからかな」

「なあ、なんで俺だけ名前じやなくて腐つたしたい呼ばわりなの? 俺はドラクエ世界
の住人なの?」

「いや、言つたろ人づてに聞いたつて。そいつが楽の名前を知らなかつたんだよ。ま、お
前がどれだけ認知されてないのかつて話だよな」

そう言うと舞子は腹を抱えて笑いだす。

腹が立つてきたのは自然現象に違ひない。きっとこいつを殴れば幾分かスッキリす

るだろう。ああー、殴りてえー。でも殴ったら、生徒指導は確定だしなあ。うーん、ジレンマ！

「そんで、実際は仲良いのか？」

「どつちつかずつてところだな。別に俺は仲が良いなんてことは思ってはいないが、桐崎はどう思つてるか知らん」

「理性の塊の楽にしては曖昧な答えだなあ」

「そりやあ曖昧にもなる。仲が良いかどうかなんて自分の主観と他人の主観で大きく異なるからな。自分は仲が良いと思つていても、相手が自分のことを快く思つていらないなんて状況は腐るようにあるからな」

「つまり、仲が良いかどうかは桐崎さんに聞いてみないとわからないと。そういうことか？」

「そういうことだ」

舞子は俺が肯定の意を示すと、顎に手にあて黙り込んだ。そして、

「いやあ、やつぱり楽は理性の塊だなあ。目の前にある事実しか信じようとしない。それ以外の不明瞭なものに対しては疑つてかかる。まあ、それがお前らしさつてやつなんだろうけどな」

データと根拠がなければ信じられない。そんなのは誰にでも当てはまる」とだと思

うが。

「でも、そんな樂が樂しそうで俺は少し嬉しいよ」

「もし、本心でそう思つてゐるならお前の目は腐つてゐるな。良い眼科知つてゐるからオススメするぞ」

「なんで良い眼科知つてゐるのよ。樂つて目が悪かつたりしたか?」

そこは察して欲しかつた。俺が自身の腐り目を気にして眼科に行つたというトラウマが想起されるだろうが。

そう、あれは俺が中学に入学する前の話だ。

俺は中学生デビューを果たそと自分のコンプレックスの一つである腐り目を矯正しようとしていた。

あそこの先生は悪い人ではなかつた。俺の話を親身になつて聞いてくれたし、治療も最善を尽くしてくれた。まあ、最終的には『うん、これは治りませんね。この目はあなた本来の目なんで治しようがないです。でも、その腐り目、DHAは豊富そうですよ?つまり、栄養がたっぷりあるつてことじやたいですか。全然悪いことじやないですよ。H A H A H A』と言われたが。

DHA豊富そうなつてなんだよ。栄養がたっぷりあるつてなんだよ。ジョークで慰めようしてくれたのはわかるが、俺は食べ物じやないんだよ?」

くそ、舞子の察しが悪いせいで、余計なトラウマを思い出したじゃねえか。

そんな察しが悪い舞子はと、トラウマに苦しむ俺をよそに再び口を開いた。

「まあ、本心で言つてるから、俺の目は腐つてたのかもな」

「じゃあもう一つ質問したい。俺が楽しそうに思ったという根拠は？」

「特にねえよ？　俺の直感さ」

「うさんくさ」
「ああ、本当にうさんくさい。こいつの直感は世界で一番信用できない胡散臭さを有している。」

「だが、今回の胡散臭さは自然と受け入れられるものであつたのは、とても不思議なことである。」

案外、舞子は事実を言い当てるのかもしれない。

実際、桐崎との日々はプラスかマイナスのどつちであつたか？　と問われると、プラスであつたと、答えられるものであつたのかもしれない。

俺はそんな可能性をふと考えついてしまつた。